



水を追いかけたら田んぼに行き着いた

一般に知られる「流域図」「水系図」は、洪水や渇水といった「異常時」の水を管理するためのものと気付きました。日本は古来水災害を受けながら歴史を歩んできました。水を治めなければ安全・安心の社会は構築できませんでした。異常時に対処する管理図を社会の共通認識にしておくことは大事です。

しかし普段は、河川の水のほとんどは農業用水路を往き、田んぼや周囲を潤し、そこからの排水が河川になり、その水はまた下流で用水路を往き、田んぼを潤し、と反復利用されて海へ注いでいます。この水みちは江戸時代に整えられ、今に引き継がれた流域の水ネットワーク。もともとは自然の水みちです。

人間以外の生き物たちは、この水を飲み水にして生きてきました。それが日本固有の二次的自然です。これまでは水循環より土地利用が優先され、田んぼは未利用地として開発の対象になり多くが消えました。そのため水みちも分断されました。でもまだ残されています。その一つが見沼代用水であり、見沼田んぼです。

荒川流域の水を学んで、見沼田んぼに行き着きました。残された田んぼを将来に残すことは自然の水みちを残すこと。また治水面では遊水池機能、利水面では渇水時の一時転用等も考えられます。ヒートアイランド現象緩和にも貢献します。水で潤う田んぼは生き物たちの生活の場になるだけでなく、都市住民の癒しの場にもなります。そして稲作を通じて培ってきた日本の文化を生きた形で将来に伝えることもできます。

同時に、水ネットワークを残すなら、つながっているからこそ下流に責任があります。水道の水は下水処理して河川に戻しますが、農地で使った水は処理せずそのまま河川に入り、閉鎖性水域に入ります。水域に負荷をかける物質は使用の場で減らしていくしかありません。それには人手がかかります。しかし今、農家は人手不足。そこで水のフォーラムの会員有志による「見沼代用水のための市民コラボ(CCM)」では、見沼田んぼの一角ですが、無化学肥料・無農薬で水田を保全し、用水路のゴミ拾いや草取り・草刈りをして農家を手伝っています。

流域の水を横断的に学んだ水のフォーラムの総括がCCMの実践活動。この活動も少しずつ軌道に乗ってきました。水のつながりで人間も生き物たちも、農家も都市住民も、みんな一緒に助け合えたらと考えています。